

介護と仕事の両立

宇賀神つかさ

東京医科歯科大学皮膚科非常勤講師

昨年、父が亡くなった。亡くなる半年ほど前からADLが急速に低下し、1日500 mの散歩ができていたのに、1カ月後には200 mしか歩けなくなり、翌月は100 m、20 mと、最後はほとんど歩けなくなった。これまで普通に日常生活を送っていたのが一変し、介護が必要な状況になった。入退院を繰り返したが診断はなかなかつかず、いよいよ亡くなる2週間前に末期の癌であることが明らかになる。母は健在であったが、高齢であり、父の介護は老々介護であった。このままでは母が健康を害してしまう！

私も、仕事の前後に介護を手伝った。しかし、仕事の合間、診療中にも携帯電話が鳴る。何度も母から「助けてほしい」と頼まれたが、そのほとんどにおいて、私は病院を離れることができなかった。テレワークをしていた夫、学校から帰宅した娘や、私の妹が職場から駆けつけて、母を助けた。公的支援は？と思われるだろうが、進行の早かった父のケースにおいて、介護・看護の支援は後手に回り、ようやく支援が追いついたのは亡くなる1カ月前であった。当時、私は世話になった親の介護すら十分にできない自分を責め、このままなら介護離職もやむをえないと思っていた。

これは私、つまりフルタイムで働く、中年介護世代のワークライフバランスの1例である。ワークライフバランスとは、本来、仕事と私生活の調和を取りながら、よりよい生活を目指すことらしい。父の介護において、果たして私は生活と仕事の調和を図ることができたのだろうか？ 実際のところ、仕事の都合をつけて、ライフ(介護)をなんとかしたわけではなかった。ライフ(家族)の中で調整し、ライフ(介護)をなんとかしていた。結局、生活と仕事の調和を図ることはできなかったことになる。医師という仕事を選択した以上いたし方ないと半ば諦めている自分もいるが、多様な生き方が尊重され、働き方改革が推進される現代において、違和感も覚えずにはいられない。

先輩の諸先生方におかれては、すでに経験済みの「介護と仕事の両立」の苦労話かもしれない。若い時分に想像力が乏しかった私は、まさか将来こんな形で親の介護が降りかかる



とは思いもしなかった。後輩の先生方にとって、私の苦労話をご自身の未来を想像し、それに備えるきっかけになればと思い、本稿を記させていただいた。

大学の診療科の働き方改革担当を務める私は、目下、来年度適用開始の時間外・休日労働の上限規制に関する話し合いをしている。理想的なワークライフバランスの実現までは長い道のりになりそうだ。